

「川崎フロンターレ」でインターンシップ

意識変化のきっかけに 榎尾博之(経営3)



▲川崎球場でローソンカップ予選のデータを入力

今回のインターンシップでJリーグのクラブ経営について学ぶことが出来ました。

私は販売&サービス部という部署に配属になり、ホームゲームやローソンカップ(フットサル大会)、パブリックビューイングの運営、チケットのデータ入力、広報活動などの仕事をさせていただきました。

また全体会議や部会といった会議に参加出来たことで、自分の意識の低さを認識することが出来、意識変化のきっかけとなる貴重な体験でした。

短期間ですが、今回のインターンシップで企業に身を置いたことは、普段の授業では経験出来ないことを肌で感じ取り、大きな意味がありました。この経験をこれからの大学生活に生かしていきたいと思っています。

熱くなれる瞬間のために 添田裕和(経営3)



▲川崎球場でローソンカップ予選の結果を速報

7月26日の対湘南ベルマーレ戦にホームゲームスタッフの一員として参加した体験を紹介します。試合開始前に本部の設営・全体ミーティングとボランティアミーティングへの参加・グッズ販売をしました。ハーフタイムの間はスタンドの見回り・お客様への対応、試合終了後は本部の片付けなどをしました。仕事の合間には、選手や監督の会見の様子も見せてもらうことなども出来ました。試合はフロンターレが勝ちましたが、この時に社員の方が言った「この瞬間のために仕事しているようなものだよ。仕事でこんなに熱くなれるものはなかなかないよ」という言葉に素直に納得する一方、うらやましさを感じました。これから就職活動が始まりますが、私も将来、人にこのように話せるような熱くなれる仕事に就きたいと思いました。

サッカーが好きで非常に興味ある職場だったのでとても貴重な体験をさせていただきました。

サッカーが好きで非常に興味ある職場だったのでとても貴重な体験をさせていただきました。

【ニュース専修10月号12面】

サーフライフセービング愛好会 山本康明さんと清水高志さん “海難事故”救助で成東署から感謝状



▲感謝状を手にする山本くん(右)と清水くん

サーフライフセービング愛好会のメンバー2人が、海難事故救助で千葉県成東警察署から感謝状を贈られた。

表彰されたのは山本康明くん(法3)と清水高志くん(経営1)。2人は8月30日午後1時過ぎ、九十九里浜の本須賀海岸で監視していたところ、カイト・サーフィン中の会社員が沖合を漂流しているのを発見、東京女子体育大学と共にレスキューボートを使って救助した。同愛好会のメンバーは夏期休暇中、九十九里浜海岸でパトロール活動を行

い(9月号既報)、同日はボランティアで活動していた。

パトロールキャプテンの山本くんは「きれいで波がいい本須賀海岸は、海水浴客ばかりでなくサーファーも多く、監視にも力が入ります。ライフセーバーの使命は、事故を未然に防ぐこと。大事になる前に救助出来て本当に良かった」。また初めてパトロール活動に参加した清水さんはたまたまその場に居合わせたのですが、いい経験になりました。他大学を含めたメンバーと共に一シーズンを過ごし、ライフセービングに取り組んできて良かったと実感しています」と笑顔で話した。

【ニュース専修10月号10面】

『たまたま子育て祭り』に心理教育相談室が協力 子どもたちとの交流コラージュ体験も



▲元気に遊ぶ子どもたちを優しく見守る



▲コラージュ体験に熱心に取り組むお母さんと子どもたち

9月7日、多摩市民館(川崎市多摩区)で行われた「たまたま子育て祭り」に心理学を学ぶ大学院生・学生が協力、子育てグループ心理相談の時間に子どもたちと遊んだり、「親と子のコラージュ体験」で癒しの時間をプロデュースした(コラージュとは雑誌や広告から切り抜いた絵柄を自由に画用紙に貼り付けて自分の心を作品にするもの)。

心理教育相談室は月1回「親と子の集まり 多摩っ子」を開催し、地域の子育てグループとも交流が深く、今回参加することになったものだ。

参加した田口貴昭さん(文4)は「予想以上の大盛況、子どもたちが元気で楽しんできたことが一番うれしかった」と感想を話してくれた。

同相談室の波田野由美助手は「実際の親子と接し本当の意味での臨床心理学を学ぶことが出来た。また地域の専門職者との交流で、自分の将来の仕事について考えるよい機会になったのでは」と学生への効果を語っている。

【ニュース専修10月号10面】